昭和天皇の危惧

張学良の拠点を叩くための熱河作戦（1933年）時、この作戦の中止を指示しようとした天皇に、奈良侍従武官長は「陛下の御命令にて之を中止せしめんとすれば大いなる紛憂を惹起し政変の因とならざるを保ち難し」と述べました。天皇の中止への動きを止めています（「奈良日記」）。「大いなる紛憂を惹起し政変」とは、天皇の排除も意味します。この言葉で天皇は中止の指示を取りやめました。

馬場伸也の『満州事変への道』は「『天皇が反対する時には短刀を突きつけても俺たちの主張を認めさす』と叫んだ昭和の軍閥」と記述しています。

そして天皇と軍部の最大の危機はもちろん日米開戦直前です。『昭和天皇独白録』によると、天皇は次の言葉を述べています。

「私が主戦論を抑えたらば、（中略）...国内の与論は必ず沸騰し、クーデターが起こったであろう」

さらに『昭和天皇独白録』は、（注）として次の文章を加筆しています。

［先の発言に加え］ジョン・ガンサーの『マッカーサーの謎』に、奇妙なほど一致する一節がある。真偽確かめるべくもないが、戦後の昭和29年9月27日、天皇が初めてマッカーサー元帥と会見したとき、（中略）...

「もしわたしが戦争に反対したり、平和の努力をやったりしたならば、国民はわたしを精神病院か何かにいれて、戦争が終わるまで、そこに押しこめておいたにちがいない。また、国民がわたしを愛していなかったならば、彼らは簡単にわたしの首をちょんぎったでしょう」［と語った］。

半藤一利氏は『いま戦争と平和を語る』で次のように記述しています。

2.26事件は一言でいえば「恐怖の梃子」ですよ。（中略）...何かといえば陸軍の上に立つ人は「わたしたちはいいが部下の方がどう出るか」と脅すんです。
昭和天皇でさえ、「わたしが開戦にノーと言えば、たぶん軍がクーデターを起こしただろう」と『昭和天皇独白録』でいっているじゃないですか。内大臣の木戸幸一なんかおびえっぱなしです。

（『日米開戦の正体』p488～489）